

洋14-16

「ネブラスカ ふたつの心をつなぐ旅」 ★★★

2014（平成26）年1月29日鑑賞＜GAGA試写室＞

監督：アレクサンダー・ペイン

脚本：ボブ・ネルソン

ウディ・グラント（父）／ブルース・ダーン

デイビッド・グラント（ウディの次男）／ウィル・フォーテ

ケイト・グラント（ウディの妻）／ジューン・スキップ

ロス・グラント（ウディの長男）／ボブ・オデンカーク

エド・ピグラム（ウディのかつての工場の共同経営者）／ステイシー・キーチ

マーサ伯母さん／マリー・ルイズ・ウィルソン

レイ伯父さん（ウディの兄）／ランス・ハワード

バート／ティム・ドリスコル

コール／デビン・ラトレイ

ベグ・ナギー（地元の新聞発行人）／アンジェラ・マキューアン

2013年・アメリカ映画・115分

配給／ロングライド

<心温まる人間ドラマがまたひとつ！そのテーマは？>

アレクサンダー・ペイン監督といえば、直近では『ファミリーツリー』（11年）でしみじみとした心温まる人間ドラマを描いた（『シネマルーム28』20頁参照）が、ペイン流の人間ドラマの温かさは『アバウト・シュミット』（02年）（『シネマルーム2』159頁参照）や『サイドウェイ』（04年）（『シネマルーム7』212頁参照）でも同じだったし、最新作たる本作でも同じだ。その結果、本作でブルース・ダーンは、2013年カンヌ国際映画祭で最優秀男優賞を受賞した。それも、マイケル・ダグラス、ライアン・ゴズリング、福山雅治らを抑え、76歳にしての受賞だからすごい。

とはいつても、本作でブルース・ダーンが演ずるウディ・グラントは「100万ドルに当選した」という手紙を信じ込み、ここモンタナ州のピリンクスから遠く離れたネブラスカ州のリンカーンまで「その賞金を受け取りに行く」と言い張る頑固じい。そんな古い手口のインチキにまんまとハマっているのだから、この男は美酒飲みの上に認知症のカゲもチラホラと……。こんなじいさんは、こちらはまだまだしっかりしている妻のケイト（ジューン・スキップ）の言うとおりに早く老人ホームに入れるべきだが、それでは物語は成立しない。

しかして、本作冒頭は一人で高速道路を歩いているウディを警察が保護するところからスタート。何やら、波乱の展開になりそうな予感だが……。

<なるほどこんな解決方法も。しかしその是非は？>

ケイトの言葉によれば、警察の保護を受けて家に戻されたのは、これが2回目らしい。次男のデイビッド（ウィル・フォーテ）が「これはインチキだ」といくら説明しても、ウディは耳をかそうとしないからタチが悪い。さらに、ウディは3回目の出奔も決行。そこに駆けつけた長男のロス（ボブ・オデンカーク）は、母親の言うとおりにウディを老人ホームに入れるべきだと主張したが、そこでのデイビッドの選択が面白い。

それはいわば「毒をもって毒を制す」を地でいくもので、くじがハズレだと納得させるために、父の望みどおり、一緒にネブラスカまで行こうというものだ。もっともこれは、デイビッドが2年間同居した恋人に出て行かれたところという「事情」に加えて、仕事先のオーディオショップにも病気だと嘘をつけば済むという「気楽さ」ゆえの選択。また、ピリンクスからリンカーンまでの車の旅は、観光名所もいろいろとあるから、そこに立ち寄るのもオツなもの……。デイビッドはそう考えたわけだが、そんなことをしてこの父親にホントに効果があるの？下手すると逆効果では……？

<なぜ当初の2人から家族4人のロードムービーに？>

『サイドウェイ』は男2人のワイン・ツアーからスタートしたが、行く先々で女に目をつけていくため、結局中年男2人、中年女2人、計4人の面白いロードムービーになっていた。それと同じように、当初デイビッドとウディの2人旅でスタートした本作も、途中からはケイトとロスが合流し、家族4人のロードムービーになっていく。さて、それは一体なぜ？

それは、サウスダコタ州のホテルでウディが酒を飲んで転び、頭を縫うほどの大ケガをしてしまい、デイビッドが病院で足止めを喰らってしまったためだ。そこでデイビッドは母親と相談し、結局その週末は、ウディの生まれ故郷であるネブラスカ州のホーソーンにあるレイ伯父さん（ランス・ハワード）の家に泊まり、月曜日に目的地のリンカーンに行くことに。さらに、日曜日にはレイ伯父さん宅で親族パーティーを開くことになったため、ケイトとロスもそこに参加することになったから、そこからは本作は、家族4人のロードムービーになっていく。ロードムービーの名作は数多いが、さて、認知症気味で金の亡者（？）のようなおじいさんを連れた、車でのロードムービーの展開は……？

<100万ドル当選！をめぐる人間模様をじっくりと>

ウディは兄であるレイと久しぶりの「ご対面」だが、双方とも無口で「そっちは？」「変わらん」と言うだけの会話だから、何とも味気ない。また、レイの2人の息子たちは不況のため仕事がないようで、一日中テレビの前に座っているだけだが、実はこの2人は後にはかなりの「曲者」であることが明らかになる。日本でも、高額な宝くじに当たったばかりに、それまで仲の良かった家族が急にケンカを始めることがある。しかして、アレクサンダー・ペイン監督は、本作中盤ではウディの生まれ故郷で起こるそんな「人間模様」＝「ドタバタ劇」を、ちょっと皮肉っぽく、しかし温かみを込めて描いていく。

最初に、ウディが「大金が当たった」としゃべってしまったのは、かつてこの地で工場を共同経営していたエド・ピグラム（ステイシー・キーチ）。すると、たちまちその話が町中に広がり、地元の新聞社から写真撮影されるという大騒動に。こうなると、さすがにデイビッドは「当選なんてインチキだ」と説明せざるをえなくなったが、いったん広がったうわさはいくら打ち消そうとしても消えるものではない。逆に、否定ばかりしていると、いかにも大金を秘密のうちに一人占めしようとしているかのように勘ぐられてしまうから、始末が悪い。さらに、弁護士の私に言わせれば、「借用書はあるの？」「返済条件は決めているの？」「それは時効でしょう」等々の問題があるカネの請求を、エドのみならず親戚の人たちもし始めたから、こりゃ大変。いくらデイビッドやレイが「100万ドル当選！」自体を否定しても、当の本人のウディが100万ドルを受け取ったら、「トラックを買う」「コンプレッサーを買う」と言い張るから、どうにも始末が悪い。小突き合い程度のケンカで済めばまだいいが、強盗まがいの事件にまで発展すると……。

<やっとうディは納得？それとも…？>

酔った挙げ句に転んで頭を縫うほどの大怪我をしたばかりか、旅の途中に目まいで倒れ込んでしまい、病院に運び込まれるウディを見ていると、こりゃとでもリンカーンまで到着するのはムリ。誰でもそう思うし、ウディもデイビッドに対していったんは「あきらめた」と言うのだが、それでも一人こっそり入院中のベッドから抜け出して目的地に向けて歩いていくウディの姿を見ていると、このおじいさん、ホントにボケて金の亡者になってしまったの？と思ってしまう。こりゃ、やはり当初のデイビッドの選択がまちがっていたのでは……？

ところが、ここでもデイビッドは更にウディの意思（執念？）を尊重し、病身のウディを助手席に乗せてリンカーンに向けて走り出したからビックリ。しかして、目的地に到着した2人は待望の「当選券」を見せることになったが、パソコンをカチャカチャと操作し画面を確認した女性事務員の答えは、「残念ながらハズレです」というもの。ああ、やっぱり。ここまでやれば、やっとうディも納得……？したかどうかは、実はブルース・ダーンの演技が巧すぎてよくわからない。しかし、ハズレの景品として「キャップ？それともクッション？」と聞かれると、ウディはキャップを選択し、機嫌良くそれをかぶっていたから、やっぱりウディは納得？それとも……？

<結末の心温まるストーリーに注目！>

ウディは100万ドルを受け取れば「トラックを買う」「コンプレッサーを買う」と言うだけで、それ以外の使い道は考えていないらしい。もっとも、トラックといっても自分が乗るだけの軽トラだから、安いもの。また、何のためにコンプレッサーを？逆に、本当にそれを買いたいのなら、2人の息子たちに頼めば、それくらいは買ってくれるのでは？本作のストーリー展開にはずっとそんな疑問がつきまとっていたが、本作ではその「種明かし」ともいえるアレクサンダー・ペイン監督流の心温まる結末のストーリーに注目したい。「100万ドル当選！」はインチキだったことにやっとう納得（？）したウディを助手席に乗せたデイビッドはモンタナへの帰路についたが、そこでウディに「ちょっと立ち寄るところがあるが、いいかな？」と質問。もちろん、ウディは「OK」の返事だが、さてデイビッドは立ち寄った自動車屋で一体ナニを？

リンカーンに到着する頃は今にも死にそうだった雰囲気ウディだが、帰り道の今はなぜか元気いっぱい！さらに、ウディは車の運転を禁止されていたはずだが、今はなぜか彼はトラックのハンドルを…？さあ、そんな終盤から結末に向けての父子の絆を確認する心温まるストーリーは、あなた自身の目でしっかりと！そして、邦題のサブタイトルとなっている「ふたつの心をつなぐ旅」の意味を、しっかりかみしめたい。

なお本作は、1月16日に発表された第86回アカデミー賞®の＜作品賞＞＜監督賞＞＜脚本賞＞＜主演男優賞＞＜助演女優賞＞＜撮影賞＞、計6部門にノミネートされたから、3月2日の発表に注目！